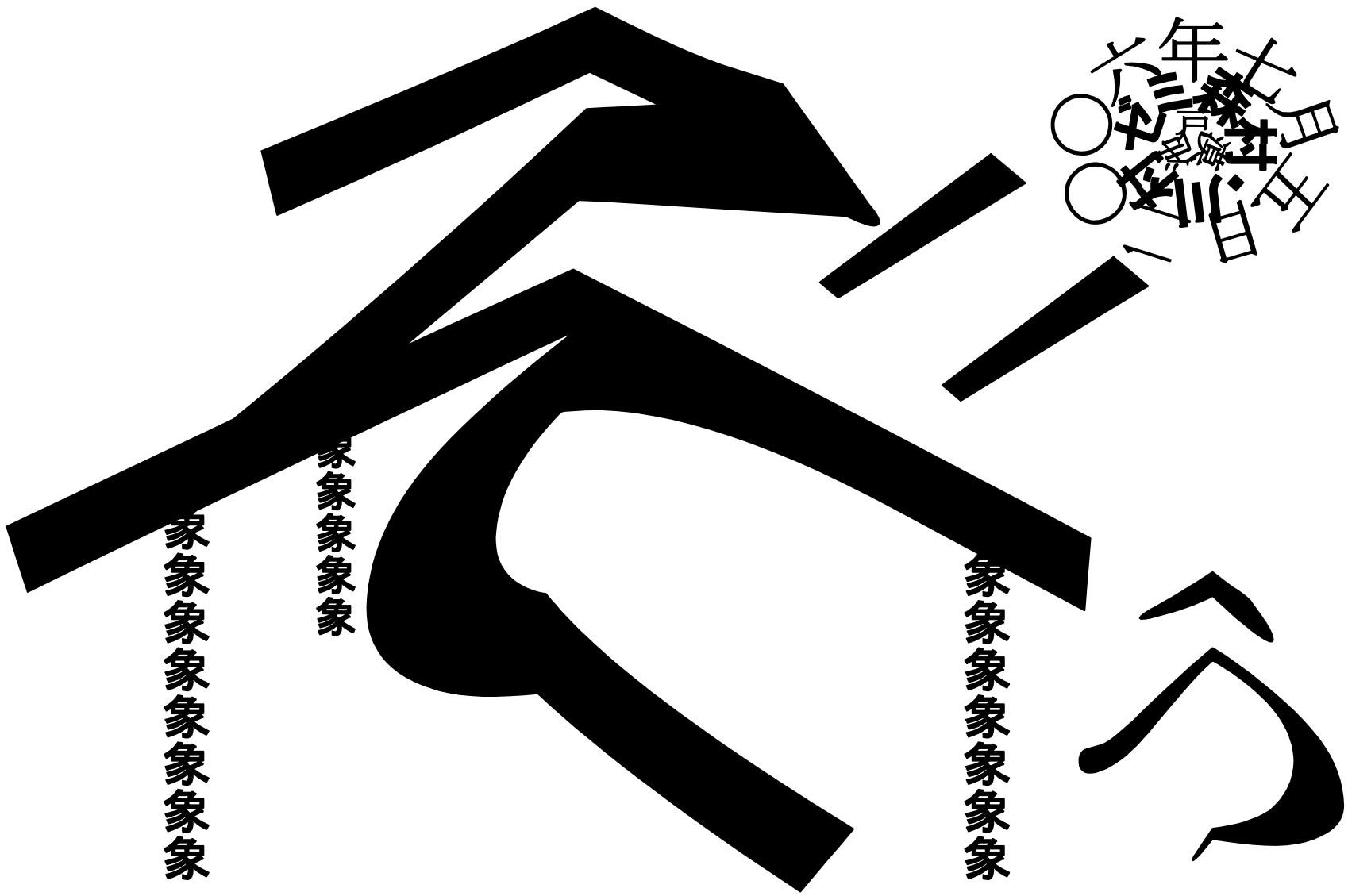


六三六  
年七  
月  
日  
六三六  
年七  
月  
日



象象象象象象象象

象象象象象

象象象象象象象象

## ④ はじめに

皆さんは、象設計集団をご存知でしょうか？恐らく、僕が個人研究で象をやると言うまでは、聞いた事の無い存在だったと思います。建築界では名が通っているみたいですが、磯崎新や安藤忠雄ほどメディアに出ているわけではないし、まして、一九九〇年五月に北海道十勝という片田舎に引っ越してきてしまったのは、事務所に泥棒が入って金を盗まれたことがニュースで取り上げられる、なんていうこともなくなってしまいうでしよう。僕自身も、もし彼らが地元引っ越してきていなければ、今回の個人研究で取り上げることは無かったように思います。では、なぜ象を個人研究のテーマにしようと思っただのか、また、なぜ実際そのテーマで個人研究を進めたのかを、いくつかの偶然と象の建築を紹介しながら見ていきましょう。

## ⑤ 象設計集団発足までの概略

一九六四年 早稲田大学の吉阪研究室を「U研究室」と改名。大学院で「吉阪研究室」が発足することになり、混乱を避けるため。

六三〜六五年 後に象設計集団の初期メンバーとなる富田玲子、大竹康一、樋口裕康らに加わる。

一九七一年 富田、大竹、樋口は、吉阪研究室(大学院)の重村力、有村桂子と「象設計集団」を結成し、風土と建築の関係に再考を迫る。

一九八一年 沖縄県名護市庁舎で有名になる。

## ⑥ 北海道十勝の建築

十勝ビール(一九九七)：地域主義的建築

・十勝の土で作ったレンガと雑木林から切り出した木で作った壁、通称「十勝大壁」

(例)北海道ホテルのフクロウとクマ、名護市庁舎のシーサー

すとう病院(一九九九)・森の交流館(一九九六)：室内環境の特徴を捉えた空間デザイン

・照葉樹や様々な木、水を用いた空間

冬の北海道の室温を利用した内部建築

## ② 象の特徴

1. 風土と建築の関係に迫るための徹底したフィールドワーク<sup>※イ</sup>
2. 遊ぶ
3. 1と2に基づいた新たな秩序(座標)の発見
4. 貧乏

### 二結王公廟

- 一九九三年 仕事依頼
- 一九九六年 設計開始
- 一九九九年 着工
- 二〇〇四年 建設中

### 『空間に恋して』(工作舎(二〇〇四))

- ・ いろはカルタの47音を基本として、地域別・建築種別などの区分を用いて編集
  - ・ カラーや白黒の写真 建設途中・竣工時・竣工から十数年後の写真
  - ・ 落書きのような絵や設計図 様々な色やフォント、大きさの文字
  - ・ 日本語・中国語
  - ・ とにかくゴチャゴチャ↓七つの原則のうち「多様性」や「あいまいもこ」の表現
- 師匠である吉阪隆正の「不連続統一体」の表現

## ③ 吉阪隆正と「不連続統一体」<sup>※ロ</sup>

「建築そのもの」を求めて、パリへ留学(一九五〇)2年間コルビュジェに師事する  
マルセイユのユニテ、モデュロール、「提案」の必要性をコルビュジェから持ち帰る

建築が誤り、悪をなす可能性を内包しながらも社会に提案していく必要性

矛盾を意に介さない(この姿勢は象のいろはカルタ「む」に表れる)

←しかし、どのようにしてこの困難を乗り越えるのか?

「共同設計」がその答えであった。

不連続統一体の考え方をういた集団設計

象設計集団はヌーの群れである、と画家・宇佐美圭司は喩える

⑦ 象設計集団7つの原則

場所の表現…高橋建設(一九九八)

・一ヘクタールの土地に十勝の森を再現  
あらゆる木々の植樹、土と雪の断熱効果を生かして、建物を土の中に埋める

多様性…名護市庁舎

・沖縄県II日本で唯一地上戦があった場所、中継貿易で栄えた場所：…等等  
石造文化を持っていた沖縄に、アメリカ軍が持ち込んだブロック建築が定着

あいまいもこ…埼玉県小笠原小学校・広島県矢野南小学校・岐阜県多治見中学校

・半外部空間

子供たちの五感を刺激する仕掛け

⑧ あとがき

象の引越しに始まり、象と高野ランドスケープの息子がそれぞれ友達であること、象の建物を意識的にも無意識的にも感覚し、それが記憶に残るものであったこと、ゼミで建築やコルビュジェを扱ったこと、吉阪隆正という人を間に挟むとコルビュジェ・吉阪・象が一本の線で繋がっていたこと、Takeo Paper Showの帰りの本屋で川村先生が『空間に恋して』を手を取ったことで、本当に知名度が高いということを知ったことなど、これだけ偶然が重なると、単なる偶然とは言い切れない、吉阪隆正のいう不連続統一体のようなものを感じてしまい「象設計集団」というテーマが自然と頭をもたげてきた。

そこで、なけなしの金を出して本を買って見たはいいものの、一冊はゴチャゴチャして読みにくいし重いし本棚に収まらない形だし、もう一冊は白地に銀色の文字のところがあるから少し周りが暗くなると文字が見えなくて不快になる。しかし高い本を買ったからには読むという意地と、象のほうに俺より上手に北海道で遊んでいるという悔しさでそれらを読み進めていくうちに、その読みにくさも象の建築の形態や建築に対する姿勢の表れであったり、光の量や明るさに対する誠実さだと気付く。それに気付いた時一人でニヤツとしてしまった。本がそうならば建築物そのものも然り。その仕掛けに満ちた造りに、写真でしか見えていなくても様々な想像を誘発させられる。

モダニズム建築もポストモダニズム建築もよく知らないし分からないけど、なんかいいんじゃない？と言える建築に出会えた気がする。

## ※イ：フィールドワーク

フィールドワークには次のものが必要です。四色ボールペン、磁石、地図 1:100 1:500 1:1000 1:2500 1:5000 1:10000 1:50000 等、ボード。スケッチブック、鉛筆、サインペン、筆ペン、色鉛筆、絵具、カメラ、そして、一〇キロを走りぬく足、いろいろなることを発見できる目ダマ、それにちよつとした感性等があれば申し分ない。（『現代の建築家』象設計集団 Atelier Zo』鹿島出版会一九八七年）

フィールドワークとは調査でも記録する事でもなく、これこそ建築だ。（『空間に恋して』工作舎二〇〇四年）

## ※ロ：不連続統一体(Discontinuous Continuity)

個々人の小さな力の一つ一つの独立を保ちながら（不連続体）、一定の結びつきをなすことにより有機的なつながり、全体としての統一のある集まりを目指し、大きな力に結び付けようと言う意味であり、不連続体統一、とも言う。例えば細胞が一定の結合方式を取ることによって一定の有機体を構成すること、あるいは天体の運行に見られる一見不連続であるが関係しながら作り出している動的な秩序のよう（<http://discont.hp.infoseek.co.jp/about/about%20top.htm>）

## 7つの原則

### 1. 場所の表現

私たちは、建築がその建つ場所を映し出すことを望んでいます。デザインが場所や地域の固有性を表現するよう努めます。村を歩きまわり、景観を調査して、土地が培ってきた表情を学びます。人々の暮らしを見つめ、土地の歴史を調べます。このようにして、デザインのなかにその場所らしさを表現するための鍵やきっかけを掘り起こしてゆきます。

### 2. 住居とは何だろうか？学校とは？道とは？

要求を知ることが出発点になります。時に人々は、自分たちの欲求や希望をはっきりとは自覚していないことがあります。そこで、人々と共に考え、新しい生活のしかたを提案していくことが、象の仕事の重要な部分となります。私たちの目標は、コミュニティ、学校、家族の基本的な生活のありさまをよく観察して、人々がつくろうとしているものの根本的な人々の今日の要求を満たす空間を創り出すこと、と同時に、その人たちの生活の地平を広げるための新たな機会を提供することです。

### 3. 多様であること

建築とは人々の出会いです。多様な空間特性が総合的に組み立てられた環境の中では、その環境を媒介にしてさまざまな出会いー人と人の、あるいは人と物のーが生まれます。私たちは計画する空間の中に形態、素材、スケールの多様性とそれらを結び付ける秩序を留意します。そこにやってくる個々の人が、

強く引きつけられる部分や全体を発見し、それを共有する人の存在に気づき、そして共に平和を信じていることができるよう願っているのです。これは均質で画一的な空間の中では期待できないことです。

#### 4. 五感に訴える

私たちは、人々の情感に強く訴える環境をつくりたいと考えています。人々が、光と影、音、香り、手ざわりや足ざわり、運動感覚を通じて空間の特性を感じ取り、さらにその外の世界とのつながりに心を向けてほしいと願うのです。私たちが用いる素材や形は、自然の要素を表現していることがよくあります。風、水、太陽、星、そして遠くに見える山を直接的に導入します。建築的な空間とは感覚的な体験であると思います。

#### 5. 自然を受けとめ、自然を楽しむ

建築は、自然の影響をかなりの程度コントロールすることができます。気候を楽しむためには、厳しい暑さや寒さや、湿気を和らげるための工夫が必要となります。深い庇、土に覆われた屋根、風の道、防風林、パーゴラ、木陰などは、私たちがよく用いる装置です。デザインの過程でもっとも重要なことは、建築と自然環境との調和を図ることです。建物の中で暑さや寒さを感じたり、季節の移り変りを感じたりできることは、大切な要素です。自然と共に暮らしてきた永い時間の中で、人間の身体は体内で時間の流れを感じるように進化してきました。私たちは、体内時計のリズムを守りながら、季節の移りに対する感受性を高めるような空間をデザインしたいのです。

#### 6. あいまいもい

あいまいもこは、限定されないで、どっちつかずで、はつきりしないことです。建築か庭か街か、内部空間か外部空間か、建物か衣服か、遊びか仕事か、今か昔か未来か、完成か未完成か、株序があるのかないのか、部分か全体か、本気が冗談か、生徒か先生か、誰がデザインしたのか、... 私たちはこのようなことについて、あいまいもこな世界に住み続けていきたいのです。

#### 7. 自力建設

自力建設とは、単に具体的な建設を指すものではありません。自らの地域を、自らの手でつくり上げてゆく哲学です。近代の制度を超え、地域を超える生命の叫びです。方法論を場所にもち込むのではなく、場所がもつ初源的な力を発見し、それらを収斂させることなのです。

機械よりは多くの雑多な人々、知識よりは知恵、速さよりは持続力、理性よりは情熱、狂気、妥当よりは過剰、規範よりは埒外のものごと、結論よりは終わりのない問いかけ、形姿に求められるものは魔力。最後に、空間の緑化がもっとも大切です。

〈参考〉 S D編集部編『現代の建築家』象設計集団』鹿島出版会 一九八七年

象設計集団編『空間に恋して』工作舎 二〇〇四年

倉方俊輔『吉阪隆正とル・コルビュジェ』王国社 二〇〇五年

象設計集団HP (<http://www.zoz.co.jp/>)

象設計集団の摩訶不思議な建築

([http://www.kousakusha.co.jp/RCMD2/rcmd\\_zou.html](http://www.kousakusha.co.jp/RCMD2/rcmd_zou.html))